

氏名(本籍)	近 ^{ちか} 森 ^{もり} 文 ^{ふみ} 夫 ^お (高知県)			
学位の種類	医学博士			
学位記番号	博乙第544号			
学位授与年月日	平成元年10月31日			
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当			
審査研究科	医学研究科			
学位論文題目	内視鏡的栓塞療法後食道静脈瘤再発に関する臨床放射線の検討 (dissertation形式)			
主査	筑波大学教授	医学博士	大菅俊明	
副査	筑波大学教授	医学博士	秋貞雅祥	
副査	筑波大学教授	医学博士	小形岳三郎	
副査	筑波大学教授	医学博士	河野邦雄	
副査	筑波大学教授	医学博士	土屋滋	

論文の要旨

〈目的〉

食道静脈瘤に対する治療法として、近年、内視鏡的硬化療法が、各施設で頻繁に試みられるようになってきた。硬化療法の緊急止血効果については意見に一致がみられているが、手術療法に比して若干再発再出血が多い点も指摘されている。本研究では硬化療法後の静脈瘤再発対策をたてるために、内視鏡的栓塞療法（EE）施行後の食道静脈瘤再発例につき、初回治療後の経過を追求するとともに、初回治療の前後に施行した経皮経肝門脈造影（PTP）、ならびにEEの手技に含まれているendoscopic varicerography（EV）の所見から静脈瘤の栓塞範囲と再発の関係ならびに再発形態について検討を行った。

〈対象、方法、結果〉

『A. 内視鏡的栓塞療法後の食道静脈瘤再発頻度』

【対象と方法】

1977年10月-1986年9月までに当施設において、肝硬変症を原疾患とする食道静脈瘤症例348例を対象としてEEを施行した。治療後、食道静脈瘤出血をみた症例および、内視鏡的に食道静脈瘤が出血の危険を有すると判定されるまでに復した症例を再発例とし、治療後の経過を追求した。

【小括】

348例中、再発は44例、12.6%であった。再発した食道静脈瘤よりの出血により死亡した2例を除

く42例に再治療を施行した。この中、食道静脈瘤再々発を9例、2.6%にきたした。また、再発した44例中、食道静脈瘤から出血した例は12例（再発11例、再々発1例）、3.4%であった。

『B.Percutaneous Transhepatic Portography (PTP) を用いた内視鏡的栓塞療法後食道静脈瘤再発因子の検討』

【対象と方法】

1977年10月9日までにEEを施行した348例中、a) 治療前に PTP を施行した症例48例を対象に、PTP による門脈側副血行路の分類を行なった。b) ついで、治療前後に PTP を施行した25例を対象として、固有供血路の栓塞の程度と再発の関係を検討した。

【小 括】

a) PTP よりみた門脈側副血行路：食道静脈瘤の供血路の違いから48例を分類すると、主要流入路が左胃静脈である52% (25例)、左胃静脈と短胃静脈の合流した噴門静脈叢である群は、40% (19例)、短胃静脈である群は4% (2例)、であった。また、食道静脈瘤以外に明かな門脈側副血行路を有する症例が14例に存在し、このうち、食道外シャントは10例 (21%) において認められた。

b) 供血路の栓塞の程度と再発の関係：固有供血路の十分な栓塞群は15例、不十分な栓塞群は10例であった。そして、各群の再発率は、7% (1/15)、70% (7/10) であった ($P < 0.01$)。

『C.Endoscopic Varicerography (EV) による食道静脈瘤血行路の判定ならびに食道静脈瘤再発形態の検討』

a. 食道静脈瘤に関与する門脈側副血行路判定におけるEVの有用性

【対象と方法】

1981年10月－1986年9月までに当施設において、造影剤添加 ethanolamineoleate (EO) を注入薬剤とするEEを食道静脈瘤例298例に施行した。この中、1) 治療前 PTP を行っており、かつ治療中のEV像の明瞭な14症例について、EVによる門脈側副血行路同定の可能性を検討した。2) つづいて、EV像の明瞭な症例146例を対象にEVから食道静脈瘤を介する門脈側副血行路の判定を行った。

【小 括】

a) EVとPTP対比：14症例中13例 (93%) において、EVによる供血路 (左胃静脈や噴門静脈叢) の同定がPTPによる同定と一致した。また、PTPで認められた食道外シャントを4例中3例において排血路まで同定しえた。

b) EVによる食道静脈瘤血行路の判定ならびに造影頻度:造影剤加EOの流入静脈は、左胃静脈 (56.2%)、噴門静脈叢 (45.9%)、短胃静脈 (9.6%) などの食道静脈瘤供血行路と、食道静脈瘤以外の排血路である食道外シャント (12.3%) に大別された。

b. EVによる食道静脈瘤再発形態の検討

【対象と方法】

1977年10月－1986年9月までにEEを施行した肝硬変症を原疾患とする食道静脈瘤症例348例中、再発症例は44例である。この中、初回ならびに再治療に明瞭なEVのえられた34例を対象として再発形態を検討した。

【小 括】

34例は、初回治療時の栓塞の程度から、固有供血路完全栓塞後再発群（Ⅰ群）16例と、不完全栓塞後再発群（Ⅱ群）18例に分けられた。

再発形態：Ⅰ群：再治療時EVでは、血管外注入となった6例ならびに静脈瘤のみへの注入にとどまった1例を除く9例において、初回治療時と異なる供血路が観察された。

Ⅱ群：再治療時EVでは血管外注入となった5例ならびに静脈瘤のみへの注入にとどまった2例を除く11例において残存供血路が観察された。

〈結 語〉

内視鏡的栓塞治療後の食道静脈瘤再発率は、12.6%，再々発率は2.6%，再発出血率は3.4%であった。

固有供血路の十分な栓塞群は、不十分な栓塞群に比して有意に再発率が低かった。

再発には、供血路の残存ならびに新生供血路の発達が大きく関与していた。

以上から、EE施行に際しては固有供血路を十分に栓塞する必要があると思われた。また、再発に対しては再治療を施行することにより再々発を低率に抑えることができると思われた。

審 査 の 要 旨

近年増加している肝硬変の死因の第1位は食道静脈瘤破裂などの消化管出血である。食道静脈瘤の内視鏡的栓塞治療法の開発により著しい福音がもたらされている。本研究は本治療法の問題点である再発につき、その長期成績、再発の原因、対策を明らかにしたもので臨床的に極めて価値の高い論文である。

よって著者は医学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。